「科学は神の存在を否定するか」

2023年6月

高校教頭　慎 繁範

天は神の栄光を物語り ／ 大空は御手の業を示す。
昼は昼に語り伝え ／ 夜は夜に知識を送る。
話すことも、語ることもなく ／ 声は聞こえなくても
その響きは全地に ／ その言葉は世界の果てに向かう。
（詩篇19：2〜5）

科学技術が発達した現代において、神を信じるなんて非科学的で、あり得ないと考えている人が多いのではないでしょうか。しかし、グローバルな視点で考えると、世界各地では何らかの宗教を信じている、神の存在を信じている人が圧倒的に多いのです。つまり、科学では証明できない人知を超えた偉大な存在があると信じているということです。科学ですべてが証明できるという考え方とは正反対で、人間の限界を認めていると換言できるでしょう。

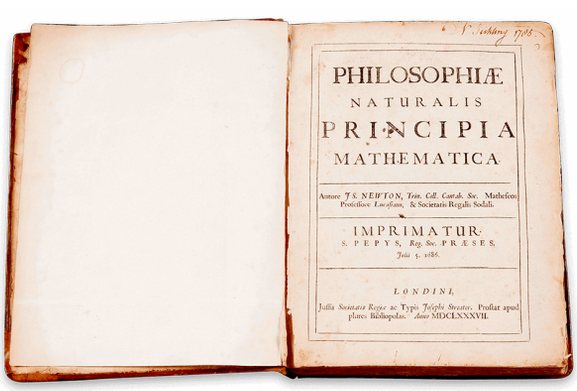
神は人知を超えた存在です。人間がどんなに努力しても神を知ることはできません。もし知ることができるとすれば、人知を超えていないので、そもそもそれは神ではないのです。しかし、神が私たち人間に、ご自身について教えることがあり、これを「啓示」といいます。人間から神に近づくことはできないので、神から人間に近づいてくださるということです。聖書は人間にもわかるように神について書かれているもので、これも「啓示」の1つですが、わたしたちは大自然を通して神を知ることもできます。聖書の一番初め、創世記1章1節にはこのように書いてあります。「初めに、神は天地を創造された。」この世のすべてのもの、宇宙や生命なども含めてすべてのものの起源は神であると聖書は語っています。神がお造りになった大自然を見るときに、それを造られた創造主の素晴らしさを知ることができるのです。これを「一般啓示」といいます。

上掲の聖書箇所に「天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。」とあります。宇宙や生命について詳しく調べていけばいくほど、とても精巧にできていて、それらはすべて神様の偉大さを表しているのだという意味です。私はフランスのルーブル美術館で本物のモナリザを見たことがあります。もちろん写真やレプリカを見たことはありましたが、本物を見たときの感動は今でも忘れられません。モナリザを見て感動するのは、モナリザの作者であるレオナルド・ダ・ヴィンチの画力・技術力が卓越しているからなんですね。これと似ています。

（次ページに続く）

アイザック・ニュートンは17世紀のイギリスの科学者で、万有引力の法則や、ニュートンの運動の法則、微分積分学などを発見し、現代科学の基礎を築いた大天才です。ニュートンが発見した万有引力の法則により、それまで神の領域と考えられていた惑星や月の運動などが明らかになり、誰でも計算で予測できるようになりました。神の領域だと考えられていた一部が人間の領域になったわけです。アインシュタインの一般相対性理論によると138億年前にビッグバンで宇宙が始まったということもわかるようになりました。科学は神の領域をすべて人間の領域に持ってくることができるのでしょうか。つまり、科学ですべてのことは証明できるのでしょうか。ニュートンは自分が発見した物理法則が、神の領域を狭めるとは考えていなかったようです。彼はこのように言っています。「私は浜辺で遊ぶ少年のようなものだ。ときどき、滑らかな小石や可愛い貝殻を見つけて遊んでいる。その一方で、真実の偉大な海はすべて未知のままに私の前に広がっている。」

卓越した科学者の中には、神の存在を信じている人が多いと言われています。ニュートンも熱心なキリスト教信者であったと言われています。国連のある調査では、過去300年間に大きな業績をあげた世界中の科学者300人のうち、8割ないし9割が神を信じていたそうです。科学を突き詰めていくと神を否定するどころか、逆に神を信じる結果になっていることがわかると思います。自然科学、社会科学、人文科学などの学問の中心にこの世界のすべてを造られた創造主の偉大さが横たわっていることを覚えてください。



Isaac Newton, *Philosophiæ naturalis principia mathematica* の中表紙
（写真提供：金沢工業大学）